

「断らない福祉」の姿を目指して

合併を機に独立法人の道を選択した介護保険訪問介護事業所「ふれあい五箇」。デイサービスや配食サービスの充実を図り、島で唯一のヘルパー車も運行している。本当に介護を必要としている人たちの声に応えていくことで、安心して老いていける島の福祉を目指す。

要望に応える 移送サービス

リオン、今日も一本の電話から一日が始まります。

「隠岐病院だけど、急に患者さんが退院することになって、リフト車お願いできますか?」「うーん、今日はいっぱいどうぞ(いっぱいだけ)、午後ならどげぞすつけ(どうにかするから)どこまで……?」

こんな会話が一日数回あります。ここは介護保険訪問介護事業所「社団法人ふれあい五箇」。この隠岐の島町で唯一移送サービスを行うことができる

事業所です。お金があり、歩いて乗れる人であればタクシーでも病院へ通院することはできますが、車椅子やストレッチャー対応となると、島内のタクシー事業所には一台もありません。移送サービスの料金はバスよりもちょっとだけ高く、タクシーよりも格安の運賃で利用者には大変ありがたがられています。

この取り組みを始めたのは平成一七年一〇月。それまでグレイゾーンで行ってきた、ヘルパー車による通院などの対応に「介護輸送に係る法的取扱」が国から示されたことにより、法的に見直しがかけられたのです。きちんと

一般乗用旅客自動車運送事業(患者等輸送限定)の経営許可を取り、その上でヘルパー車でのヘルパーによる通院などのための乗車、降車の介助ができるようにしたのです。

離島では公的公共機関が少なく、高齢者の要求に一致したこのような取り組みは、一事業所の努力だけでは隠岐の島全体をカバーすることはできません。みなさん、連携して積極的に取り組みませんか。がんばりましょう!

さて、この「ふれあい五箇」は町村合併前には五箇村の社会福祉協議会として事業を展開していました。介護保険実施前から「福祉に休みはない」と

いう考えのもと、いまでは当たり前になつている土日のデイサービスを行い、三六五対応の配食サービスも実施してきました。そんな中で介護保険制度が始まる頃には村の財政も厳しくなっており、以前から社会福祉協議会も独立採算で運営を行うことが求められていました。職員の力は大きなもので、実際に黒字運営を順調に続けてきていたのですが、なんと降つてわいたのが町村合併です。

一つの自治体には一つの社会福祉協議会ということが法律で決められており、隠岐島後の四町村も合併となれば社協も合併ということになります。現在喜ばれているサービスは四町村が一緒になつても継続して続けられるかどうか？ 職員での協議を何回も重ね、私たちは法人独立の道を選びました。社協職員として残れば身分的には安定しているかもしれませんが、身近な住民のみなさんに喜んでもらえるサービスを続け、これまで積み上げてきた介護保険を軸とした社会福祉の理念をさ

らに進めていくために、小さくても小回りのきく体制を選んだのでした。

その後の町村合併の中で、この地域の役場機能は本庁へ集約されるようになり、農協がなくなつていくなどとさびれていく一方の周辺部。この決断は、ひときわ元気で頑張っている福祉の拠点として輝きを放っていると自負しています。

豊富な 内容デイサービス

通所介護事業についてもいくつか特色があります。ふれあい五箇デイサービスは介護保険が始まる前から在宅福祉に休みはないという考え方で取り組んできましたが、「お盆や正月に利用者があつたの？」と思われたいでしょう。これが「うちにおつても同じことだ」と言われる方がいたり、お風呂がなんと「隠岐温泉GOKA」の湯を引いているのです。これが大変喜ばれており、年間利用へとつながっています。利用者も当初は一五名定員でしたが、二五

名へと増やし、さらに三五名へ、そしていまや五〇名定員です。皆さんは祝日も関係なく利用されています。

五〇名もおられれば、認知症の方、寝たきりの方、予防目的のお元気な方と幅広く、みんなが一緒に活動となると個人の希望への対応は薄くなつてしまいがちです。デイサービスを利用される方たちが一番苦手と言われるのは、「みんなと一緒に、したくもないことをしなくてはならないこと」とよく聞きます。

そこで「ふれあい五箇」では班編成を行い、比較のお元気な方々は「いきいき班」として、レクリエーション活動や創作活動、畑でのサツマイモづくり、ゲーム、外出。はたまた、もつたいないの理念をいかした廃油せっけんづくり、牛乳パックのリサイクル活動。住民の皆さんの作つてほしいという要望からゴキブリ団子づくり。さらに季節の漬物づくり、味噌づくり、などなど多彩な活動を取り入れています。

そして、「パワーリハビリ班」。これ

は介護予防の目玉となっている運動器機能向上の手法として注目されている取り組みです。専門機器を使用して完全に関節などを動かすことにより、老化や障害などにより動かさなくなってしまう筋肉や神経の連携をなめらかにすることができます。これまで実施した方からは「姿勢がよくなり、身長が伸びた」「痛みが軽くなった」「明るくなった」などの声が寄せられています。「ふれあい五箇」では島唯一のパワーリハビリテーション実施のデイサービスであり、利用を開始される高齢者が後を絶たず、順番待ちになることもあります。

また、「お楽しみ班」として小規模の部屋で、認知症などの小グループ活動を実施しています。個別対応を基本におなじみの場所で、おなじみの職員対応を中心に、ゆったりとしたスケジュールでのんびりと過ごすことができよう配慮しています。ここの活動の目玉は喫茶活動。昼食が終わると他の班の利用者のみなさんも「コーヒー

一杯」「今日は昆布茶にしようか」などとても楽しみにやってこられ、注文する姿があります。なんでも一杯二〇円というお手軽な安さ。朝二〇円を握りしめてやってこられる利用者もあります。認知症のお年寄りさんもこのときとばかりに洗ったカップを布巾でふいたり、お金を預かったりと忙しくされています。することがあるということ、頼りにされるということは、そのときばかりでも人間しゃんととなります。

また、ふれあい五箇デイサービスの特徴に多彩な趣味活動があります。先ほどから述べているようにデイサービスに出かけてもみんな同じ活動しかできない、みんなゲーム、みんなで昼寝ということとは嫌だという声をよく聞きます。

ふれあい五箇では週一回のペースで「手芸クラブ」「陶芸クラブ」「書道クラブ」を行っています。ただ職員が世話を焼くというのではなく、島内きつてのその道ではプロ級の講師をお願いして（もちろん講師料をお払いして）、

活動の指導に当たっていたいています。すると、八〇歳、九〇歳の方が、昔取った杵づかとはいえ、どんどんなまり、しかも腕が上達してくるという現象が起きてきています。続いていると、この楽しみのためにデイサービスに通っているという声も聞きます。

この春からは、男性利用者のために「木工クラブ」も始めました。かつて腕を鳴らした大工さんたち、嬉々として流木磨きに向かい、花台や置物の制作に汗を流しています。

それは、利用者さん自身がお客さんではなく、自らが参加することを大事にし、選ぶことができるということを大切にしているからです。敬老会手作り敬老会で曜日ごとに出し物を決め、合唱や合奏、踊りなどステージに上がって披露します。また、秋の恒例「どんと祭り」という地域の健康福祉祭では、総合学習で「ふれあい五箇」に通っていた中学生と『五箇の四季』という劇を行い、衣装を着けて伝統の行事をステージの上で披露し、「こげな年



どんと祭りで、中学生と舞台にあがる。



陶芸の匠？



敬老会ではみんながスター。

喫茶活動。「コーヒー1杯おくれよ」。



こりゃ〜気持ちいいわ。

いつも子どもたちがそばにいる。

になって舞台にあがるてわの」と癖になりそうな様子です。楽しいことが一番です。食事・入浴・排泄の介護もちろん懸命に取り組みますが、どうしても利用者の方々に喜んでもらえるかどうかしたら楽しんでもらえるかを一所懸命考えて取り組んでいます。

食は 在宅福祉の要

さて、介護保険以外の取り組みですが、配食サービスはその大きな取り組みです。私は介護保険が始まる時に「同じ保険料を払うのに、お元気だからと何もサービスを利用しないとということはありません。絶対配食は増える」といっていましたが、暮らしていく上で食べることは待ったのきかない重要な事柄です。このサービスも、三六五日、年中実施です。在宅福祉を本気でやるなら、それは当たり前ではないでしょうか。

届けるのはボランティアの方々です。これも「ふれあい五箇」の大きな特徴

です。「地域で支える」ということを無理なく体現しています。だいたい毎日三〇食くらい、三〜五コースになります。土・日曜は役場の課長補佐さんたち、労組青年部さんたちも交替で行っています。

この配食サービスは行政の地域支援事業の一つで、「ふれあい五箇」のほかにもたくさんの方々の事業所で行っていますが、糖尿病食、腎炎食など特別食になると「ふれあい五箇」でしかできません。高齢になると何らかの病気をもって生活するのは仕方ないことなので、もっと多くの事業所で病人食が取り組めるようなネットワークづくりが必要です。もしかしたら新たな起業が可能かもしれません。

先頃、「市町村合併をしない宣言」をした福島県矢祭町に地域福祉の視察研修に行ってきましたが、茨城県や福島県のあたりでは、事業として配食サービスを行っていますし、その必要もないということでした。というのも、一人暮らしの方、高齢者だけの世帯が

少なく、家族がいらつしゃるということでした。同じ過疎問題でも、鳥根県や隠岐の状況はまた違っているのではないかと、さらに厳しいものがあるのではと思ってしまうました。

このほかに、身体障害者デイサービス、ホームヘルプサービスにも取り組んでいます。こんなふうには小さい地域です。、いまある福祉の資源を、できるだけ有効に活用すべきだと思っています。

また、子どもたちの放課後や土曜日の安全で豊かな地域生活を保障しようと、学童保育「ごかつこクラブ」も実施しています。「ふれあい五箇」では土曜日、夏休みなどお年寄りの方と一緒に活動ができ、暴れたりしたら「やかましい！」とか叱られたり、昼食も一緒に食べるので「行儀よく食べ〜」とか言われたりしながら、育っています。この「ごかつこクラブ」を行うことでさらに、子どもからお年寄りまでどんな障害があってもこの地域で安心して暮らしていくことを援助していこ

う、という「ふれあい五箇」の目指す福祉がよりわかりやすく住民のみなさんにアピールできるのではないかと思っています。

「福祉の心」の実現 Ⅱ「断らない福祉」の実現

やはり、生活のいろいろな問題をかかえておられる住民のみなさんの、すぐに役立つ問題解決の手段を持つていふということ、これは重要なことだと思います。「明日の昼ごはんをどうしようか？」といった場合にヘルパーが

行きます。配食があります。お風呂に入りたいとなれば、すぐ、「今日の午後いかがですか？」という対応ができることは、住民のみなさんにとっては大変心強いのではないのでしょうか。

介護保険もっている市場原理、契約原理からいくと、民間事業所の競争の時代になったといわれましたが、一番の問題は社会福祉のサービスが必要なんだけどサービスを受けることができないう方、拒否される方などが取り残されてしまうことだと思っています。わが隠岐の島町でも、一人ひとりの

その方にふさわしい暮らしの援助をつくり出すことは難しいと思われまふ。生活はまさに個別的な事柄です。小さいけれども「無理です」「できません」を言わない福祉Ⅱ「断らない福祉」を目指して頑張ります。そうすれば、住民の皆さんも励まされ、在宅生活を続けていこうという思いにつながっていくのではないかと思います。

島づくりを支える基本は福祉だと思っています。「福祉の島」としてここに暮らしている人々が幸せであることが一番だと思っています。

おきどうご 隠岐島後 data

島根半島の沖合に位置する日本海の島。隠岐諸島のなかでは最も大きい。面積241.58km²、周囲211km、人口16,688人（平成19年9月現在）。漁業を基幹産業とし、農業では稲作、葉タバコ、豆類などを主としている。暖流と寒流が合流する島でもあるため、北方系、南方系の植物が混生。独自の生態系を活かした観光産業にも力を入れている。平成16年10月に島後4町村が合併し、「隠岐の島町」となる。



池田真理香 (いけだ まりか)

社団法人「ふれあい五箇」事務局
 社長。隠岐島後五箇出身。大学で福祉を学び、福祉の心は人間らしさだと極める。山田洋次監督を尊敬し、寅さんを他人とは思えず二女にさくらと名づけ、寅年生まれの子に長男でも寅次郎と付けようとしていたが、めでたく？女の子で恨まれずに済む。まわりの人を喜ばせることに無上の喜びを感じる根っからの喜劇人は昭和32年に生まれました。